

目次

2009年度日本女性学会大会報告……………	1	会費改訂について……………	12
シンポジウム：			
コーディネーター、参加者の感想……………	1	研究会報告……………	15
特別分科会……………	4	幹事選挙管理委員会からのお知らせ……………	15
ワークショップ……………	5	会員の著作紹介……………	15
個人研究発表一覧……………	5	会員の著作掲載のお知らせ……………	15
ビデオ上映・懇親会……………	6	会員の投稿について……………	16
日本女性学会第30回年次総会：		研究会のお知らせ・研究会募集……………	16
議案と報告……………	6		

2009年度日本女性学会大会 報告

日時：2009年6月27日（土）・28日（日）

会場：お茶の水女子大学

日本女性学会設立30周年記念特別企画

大会シンポジウム（文字通訳付）

今ジェンダーの視点で問い直す貧困と労働

パネリスト：栗田隆子・赤石千衣子・田中かず子

コーディネーター：西田みどり／進行：柚木理子・海妻径子

特別企画分科会1 女性の貧困と労働（文字通訳付）

司会：伊藤淑子・井上恵子

特別企画分科会2 フェミニズムから考える環境危機

コーディネーター：深江誠子

シンポジウム報告

西田みどり

今回のシンポジウムの最も大きな特徴は、当事者の立場で活発な発言と行動を続けている方をシンポジストとしてお招きしたことである。テーマは「今ジェンダーの視点で問い直す貧困と労働」で、主に問題とされたのは、①女性の貧困は見えにくい、②女性の生きる場と労働形態が社会の中で置き去りにされている、ということだった。当事者の報告は切実であると同時に臨場感あふれるものであったが、何より痛快だったのは彼女たちのそんな現状に対する

闘い方の報告である。

自ら媒体を立ち上げて発信し、行政に対してはデモを、また、たくさんの人たちの理解を得るためには頻繁にシンポジウムなどのイベントを企画、さらに他の運動体と連帯することで直接現状を改革しようとするなど、活動は多岐にわたる。シンポはそんな旬の方々の顔合わせで、刺激的な発言が繰り出された。以下、その一部をご紹介します。

「フリーターズフリー」を立ち上げることで自力で発信の場をつくった栗田隆子氏は、大学院を修了したのち研究者の道を歩まなかった自らの生き方を軸に「独女」の生きる場について問題提起し、人と人が繋がっていくことの重要性を述べた。栗田氏は現在、さまざまな女性の共同体と対話の機会を設ける一方、女性と貧困ネットワークに参加し、また「働く女性の全国センター（ACW2）」の運営委員としても活躍している。行動によって現状を打開していく姿勢は発言の中に反映され、新しい女性の生き方の萌芽を私たちに示してくれた。

「しんぐるまざあず・ふぉーらむ」でシングルマザーの声に耳を傾けてきた赤石千衣子氏は、彼女たちの置かれている「困難」をデータを駆使して報告した。シングルマザーはよく働いているにもかかわらず母子家庭の年収は低く、さらに児童扶養手当が所得によって減額されたり手続きが煩雑になっていることでさらなる困窮に追いやられている。中でも圧巻だったのは、赤石氏自身のシングルマザーとしての体験と、現場の生の声の報告である。その現状を打開するために、栗田氏とともに女性と貧困ネットワークを立ち上げ、同時に反貧困ネットワークと共闘することで行政を動かそうとしている。また「かたり・れん」にも触れ、「女性たちは語りたがっている。もっとその場が必要だ」と述べる。赤石氏の一連の活動も「繋がる」がキーワードである。

日本女性学会会員であり、「女性ユニオン東京」「働く女性の全国センター」に研究者の立場から関わってきた田中かず子氏は、性的役割分業を基盤とする社会構造の変遷と日本女性学の特徴について報告、女性労働者がユニオンに加入して共闘することの重要性を訴えた。田中氏が強調するのは「弱さを絆に」である。社会で最も弱い存在を生かすことができる仕組みが必要だとし、人々を分断しない新しい価値軸の構築が求められているという。現在の田中氏の活動はそれを目指す一環であり、栗田氏、赤石氏の活動ともリンクしている。

時間の関係もありフロアとの討論は十分ではなかったが、3人の報告とともに提起された問題は、個々の参加者が自身の現場に持ち帰って、今後の活動を通して答えを模索していくものであろう。



日本女性学会シンポジウム感想

蟻川千晶

この学会に初めて参加した感想を率直に述べたい。まず、栗田・赤石報告での指摘は、「婚姻制度から外れること自体が総体としての女性のリスクである」という点に集約できるであろう。男性稼得者モデル中心の労働市場に人々の生存を丸投げしてきた戦後日本の社会体制の中で、労働者としてまともに扱われない女性が、扶養者としての夫なくして現在の社会を生きることの困難さを両氏は指摘された。この点に関しては深く共感するところである。

だが、今回の報告には考えさせられた点も多い。ひとつは、今回のテーマである「女性の労働」が、有償労働の論議にのみ終始したことだ。女性労働に関する第二波以降のフェミニズム議論を踏まえるならば、家事労働やケアなどの女性が担われてきた無償労働についての視点があって然るべきではなかったか。

また、3氏は共通して「女性学は労働を無視してきた」という前提のもとに報告をされていたが、これにはとて

も賛同できない。長い間無視され続けてきた女性の労働・貧困問題を論じてきた者こそ女性学研究者であるのに、安易に「無視」というのはいかがなものかと思う。実際に女性の労働を無視してきたのは、十分な有償労働を行う者のみを「労働者」と見なす成人男性中心の労働論のほうではなからうか。

さらに、今回の学会で度々見受けられた女性研究者／非「研究者」という対立軸はシンポジウムにおいても顕著であったが、考えるべきは、その怒りはなぜ女性の研究者にのみ向かい、なぜ男性研究者および「男性たち」には向かわないのかということだ。これには、女性学が対峙すべきジェンダー問題の構図の中に女性学会自身も巻き込まれているように思われ、女性同士が「女性としてつながる」ことの困難さを改めて考えさせられた。

紙一重な「他女」への想像力を

羽田野慶子

ジェンダーの入門的な講義をするとき、私が最初に取り上げるのは男性と女性の間の統計的な格差である。賃

金であれ、進学率であれ、グラフ等を使って誰の目にもわかる形で示すことのできる男女差は、社会秩序に埋め込まれたジェンダーを説明する上で非常に便利だ。しかし、ここから始めて女性内の差異—正規／非正規、シングルマザー、貧困女性、外国人女性、等々を取り上げ、それらが同じくジェンダーの問題であることを説明するまでには相応の時間と労力を要する。もちろん私の力不足に拠るものだが、ジェンダーという言葉に初めて触れる人々にとって、それらを一度に理解するのは困難であることも事実だろう。フェミニズムは、男性と女性との間にある差異・格差・不平等を明らかにしてみせる言葉や技術をこれまで十分に蓄積し、磨き上げてきた。「性役割分業」、「異性愛主義」といった用語、ジェンダー統計などの手法がそれにあたる。しかし一方、女性の内部にある差異を詳らかにし、かつそれらをつなぐ方法論を探る作業はまだ始まったばかりだ。今回のシンポジウムに参加して改めてそのことに気付かされた。とりわけ栗田氏が用いた「他女」という言葉が印象に残った。男性という他者との関係性とは異なり、「他女」との差異は実は紙一重だ。現在、独身の正規雇用でも、将来は非正規のシングルマザーかもしれない。そんな「他女」への想像力を、女性の連帯、そして貧困女性でも安心な社会づくりにつなげていきたい。

「貧困」問題から——シンポジウム感想文

堀江有里

今回に限らずなのだが、この種のシンポジウムを聴いて、何とも表現しがたい気持ちなることが多い。運動や生活の“現場”からの声が届けられるとき、フロアにいる“わたしたち”は、それをどのようにリアルに受け止めることができるのか。じつは「良いお話を聞きました」で通り過ぎてしまうことが多いのではないだろうか。いまでも自分自身が問われている事柄に、目の前の「宿題」に手をつけていないような居心地の悪さのなかで、わたしは感想文をしたためている。

紙幅が限られているので、大枠の感想のみ述べておく。田中かず子さんが、学会のアンケート調査の年収項目について、1,000万円以上のところにさらに100万円単位の区分けがなされていることを指摘された。つまりはそれだけの収入をもつ人たちがこの学会には存在しているのだ、ということの例として。この点について、わたしのなかでリンクしたのは、学会費が収入に応じたスライド制になるという話だった。前日の総会の結果を聞いて愕然とした。「年収400万円」がボーダーだという。

わたしも含め、日常的な付き合いのある友人たちは、その半額以下の収入で生活している。それぞれ30代、40代の“働き盛り”だ。そのなかには子育てをしている人たちもいる。つまり、そんな人間にとって、「年収400万円」とは、あえて言えば、“金持ち”の部類にすぎないのだ。

もちろん、低収入を自慢するつもりも、収入の多い人々を責めるつもりもない。ここでわたしが考えたいのは、この女性学会のなかにある格差をどのようにとらえることができるのか、ということだ。大きく横たわっている格差の問題をつなぐような想像力を、そして対話を生み出すことはできるのだろうか。これもまたしばらく考えていきたい「宿題」である。

シンポジウム感想

吉野太郎

私は10年ほど前から、キャンパスにおけるセクシュアル・ハラスメントをなくす活動に関わっていて、この春会員になったばかりである。30周年記念シンポのテーマ「貧困・労働と女性」は時宜を得たものだ。現在の社会状況のみならず、キャンパスにおけるハラスメント問題にも大きく重なる。大学における女性の比率は、常勤教員のなかでは以前から圧倒的に少ないのにかかわらず、秘書を含む非正規雇用職員の中での比率は昔から高かった。最近ポストクの厳しい就職難である「高学歴ワーキングプア」に注目が寄せられているが、これは男性ポストクすら非常に厳しい就職難に直面したからではないだろうか。シングルマザーの方々が昔から向かい合ってきた、そして最近急に取り上げられるようになった貧困問題と重なってくる。シンポの中で栗田さんは「学会参加者の中での違いを認識すること」「学者であるところから一歩も引かずに発言して欲しい」と提起した。セクシュアル・ハラスメントの被害者の中には“同じ女性だからわかり合える”という言葉によってかえって傷を深める人がいる。またこの場が学会である以上、学者が持つ特権性を併せ持ち、それを逃れて発言することはできない。この発言に、赤石さんの「女性のネットワークでは戦う力が足りないと思った」と言葉が重なってくる。この学会は、赤石さんが言う“女性のネットワーク”の中と外に、それぞれどのような力を持ちうるのだろうか。

特別企画分科会（1） 女性の貧困と労働

- ・谷村和枝：「低賃金労働」力の補完と「管理売春」—日本入国人身売買の「搾取」と「人権」に関する再考察
- ・内藤和美：女性・男女共同参画センターの職員問題
- ・瀬山紀子・臼井久実子：障害女性と貧困
- ・清末愛砂・青山薫：「高学歴ワーキングプア」問題を考える

報告

秋山洋子

特別分科会1は、大会シンポジウムのテーマに呼応する形で報告者を募集し、シンポジウムと同日の午前中に開催することで、全体としての一貫性を持たすことを意図して企画された。採用された4件の報告は、国際的な経済格差を背景に日本で性を搾取されるアジア出身女性の問題（谷村和枝報告）、女性・男女共同参画センター職員の労働の実態と問題点（内藤和美報告）、障害女性と貧困の問題（瀬山紀子・臼井久実子報告）、高学歴ワーキングプア問題（清末愛砂・青山薫報告）とテーマや方法は異なるが、それぞれ異なる角度から女性の貧困という複合した問題に光を当てていた。各30分の報告と質疑がおわったあとの自由討論では、センター職員や高学歴ワーキングプア当事者から、報告の内容を補足するような活発な発言が次々に出て時間が足りないほどだった。また、「障害女性と貧困」の報告を機会に、今回初めて文字通訳を導入したが、情報保障の重要さと同時に経費や機材準備などの面での難しさも認識し、貴重な経験になった。本学会の低予算に合わせて無理な仕事を引き受けていただいた文字通訳グループ・ユビキタスの皆さんにあらためて感謝したい。

特別企画分科会（2） 「フェミニズムから考える環境危機」

- ・右衛門佐美佐子：エコフェミ批判の呪縛から今
- ・富山洋子：いのち育む環境への暴力を断ち切るために
- ・近藤和子：西欧のフェミニズムと環境問題…緑の党を中心に

報告

深江誠子

参加者が4、5人で始まった分科会。30年間、やって来なかった環境問題を提起したのだから、やむを得ないとは思った。

まず、右衛門佐（よもさ）さんからの報告である。最初に「自然と文化」について、話してくれた。女性問題が「自然」においやられるのはいけないし、「母性愛」というのに女性学会が距離を置き始めたのだけれど、それを気に掛けるだけでいいのであって、環境は悪化しているのだから、それを考えていかないと。例えば温暖化問題でもあと平均温度が2度上がると、今の生活は難しくなる。

富山さんは、ずーっと消費者運動をされてきた方で、男女の領域を崩していくのが人権や平和では大事である。その意味で女性も環境問題に取り組むのが必然である、と話された。近藤さんは、グリーンナムで核に反対するドイツの女性たちの壮絶な闘いのビデオを上映された。それがキッカケで「緑の党」が生まれ、その党によって、ドイツは風力発電や、太陽電池に変えつつある。

私の発言は、「母性愛」が戦争につながる、という論理で、女性学会も環境問題を扱って来なかったことへの疑問である。「母性愛」を私は「親性」と呼び変えている。この「親性」で問題なのは、その感情は素晴らしいのだが、それを、どう「表現」するかが問題なのだ。戦争につながったのは、この愛が強いだけに、為政者に利用されて、戦争に協力する結果になった。だからこそ、戦争や環境破壊と闘う表現力に変えていく必要があるのだ。

ワークショップ報告

ウィメンズ・アクション・ネットワーク： ウェブで発信するフェミニズム

荒木菜穂

本WSでは、2009年6月に設立された、女性をつなぐウェブサイト「ウィメンズ・アクション・ネットワーク（WAN）」に関する意見交換が行われた。

WANからのサイト説明では、趣旨やコンテンツ紹介とともに、「女性をつなぐ」という表現について、ジェンダー中立的を掲げていても男性中心的になりがちな現実のオルタナティブとして、「男性」でない人も安心して利用できる場にしていきたいということなどが述べられた。

参加者からは、日本の女性運動の新たな展開としての、「女性」に関するウェブ活動への期待の声が上がった。また、動画や、資料のダウンロードといった機能の整備、携帯サイトの充実、海外の女性団体とのリンク、助成金情報などの具体的な提案、また、様々な情報やサイトをリンクするポータルサイトの側面を持たせてはどうか、という声もあった。一方、すでに欲しい情報が明確な人々向けのサイトであるよりも、いわゆる「女性の活動」と接点のない人々への情報提供の重視をという意見も出された。

「ジェンダーフリー」と「バックラッシュ」 を再考する

山口智美

最初に、女性学会の中心を担ってこなかった山口智美、荻上チキ、斉藤正美から、女性学のジェンダーフリー論争、バックラッシュ対応のストラテジーに関する問題提起があった。共通して指摘されたのは、現場、ネット上双方のバックラッシュ現象の実証研究の欠落、女性学のネット対応のまずさ、地域現場からみえる、女性学の行政依存のトップダウン方式の限界などだった。それに対して、女性学会の幹事をつとめた伊田広行、金井淑子、細谷実、井上輝子、および、学会外から小山エミが、コメントを述べた。男女共同参画政策や、女性学のジェンダーフリー推進策とバックラッシュ対応をどう評価するか、「バックラッシュ」現象をどう理解しているかなどに関して議論が進む一方、立場の違いも浮き彫りになった。聴衆が80名以上と、大教室がほぼ満員となり、会場発言も多く、後日には参加者のブログ上での報告や議

論もあり、このテーマへの注目度の高さが伺われた。

ポルノ被害と子どもの人権

山本有紀乃・二瓶由美子

報告は、「着エロ問題と子どもの人権」「理論社問題とポルノ被害」「性暴力ゲームと子どものポルノ被害」の三つを主要なテーマに選びました。「着エロ」とは、線のように細いビキニをつけるなど、一応「着衣」した「エロ」つまりポルノで、着衣しているために児童ポルノ禁止法に問われないため、18歳未満の少女（12歳や10歳以下も）が使われており、事実上児童ポルノ法の抜け道となっていることが示されました。また、児童書出版の老舗が中高生向けの性の教養書に、暴力ポルノの製作で有名なAV監督を起用した問題を報告しました。さらに国際問題になった「レイプレイ」などの性暴力パソコンゲームを実演で紹介し、その問題点を提起しました。報告の後に参加者とのあいだで討論が行なわれ、活発な意見が出されました。

個人研究発表

第1分科会

- ・インドにおけるDV法の制定とその運用状況

清末愛砂・福嶋由里子

- ・ネワールの女性自助組織の相互扶助と「カースト／ジェンダー構造」の変容—農民カースト集団の女性の役割を中心に— 竹内愛
- ・サンタル女性の購入決定権と経済的力量 千葉たか子

第2分科会

- ・科学技術とリプロダクティブ・ライツ 塚原久美
- ・がん患者の内分秘療法をめぐる理解と受容におけるジェンダー 佐藤（佐久間）りか
- ・日本を男性化する：国家的理念の表象としての太陽の塔 手島妙子

パネル分科会（1）

両性間パートナーシップに関する諸問題

- ・同性婚と人権—国際法・比較法の視点から 谷口洋幸
- ・日本における「同性婚」の〈困難〉 堀江有里
- ・レズビアン（カップル）の仕事と経済の実態 釜野さおり

第3分科会

- ・指定管理化される女性センター—その過渡期的分析 山崎明子・瀬山紀子・水島希
- ・地方女性議員のリクルートメントについて—神奈川県

- 議会および県内の自治体議会のデータから 大木直子
 ・女性の活動の「地域・社会への貢献」の内実—女性活動団体メンバーへのインタビュー調査より—

堀 久美

第4分科会

- ・女性技術者のキャリア形成過程に関して—業界別の特性をみる— 内田由理子
 ・第1次～第6次「主婦論争」にみるジェンダー規範の変容—性役割規範からライフコース規範へ—

妙木 忍

- ・〈英語〉をめぐる女女格差と女女断絶 北村 文

パネル分科会（2）

日本のコンテクストにおけるクィア

- ・現在における gender identity の「説明」とその問題点—なにを洗い出すべきか— 石田 仁
 ・『同窓会』における男色の表象をめぐる 風間 孝
 ・「あたしたちはここにいますよ」—日本の地方都市に住む一人のレズビアン の生活事例— 河口和也

ビデオ上映・懇親会

今年度も懇親会出席の非会員の方々のために総会時間の間ビデオ上映会を行った。「私のニキ」を上映し、参加者は約10人であった。

懇親会は「赤かぶ」ケータリングでお茶の水女子大学内で開催した。会員非会員合わせて67人の参加があった。

日本女性学会 第30回年次総会 議事次第

日時：2009年6月27日 17:00～18:00

会場：お茶の水女子大学 306教室

開会（司会 吉原令子幹事）

議長と書記の選出：議長に古久保さくら会員、書記に牟田和恵幹事を選出

出席：44名

議案1. 2008年度活動報告

(1) 総括（木村涼子代表幹事）

- ・30周年記念大会ということで企画委員会を立ち上げ会員の声をより生かす大会運営を図った。
- ・会費段階制導入
- ・来年度大会に向けての31周年記念プロジェクトの立ち上げ
- ・会員数減少傾向

(2) 会員数の動向（海老原暁子幹事）

- ・2009年5月現在 会員635名

(3) 2008年度大会および総会の開催（6月14・15日 アピオあおもり）（海老原暁子幹事）

(4) 研究会の開催（海妻径子幹事）

- ・2009年3月22日にお茶の水女子大学ジェンダー研究センターにて、2009年度大会シンポジウムに向けての事前研究会を開催。西田企画委員の趣旨説明、パネリストの赤石千衣子、栗田隆子、田中かず子氏より報告。

(5) 学会誌の編集・刊行（吉原令子幹事）

(6) 学会ニュースの発行（伊田久美子幹事）

(7) メールニュースの発行（諸橋泰樹幹事）

(8) HPの運営（諸橋泰樹幹事）

(9) 学術団体連携（内藤和美幹事）

(10) 幹事会の開催について（海老原暁子幹事）

(11) 31stプロジェクト（内藤和美幹事）

質疑

- ・学会誌について、縦書きと横書きに変えることへの反対意見、両方併用の可能性の意見が出された。これに対し、吉原幹事から、多くの学会誌が横書き表記に変えている、外国文献の表記のしやすさ等の理由が挙げられたが、幹事会に持ち帰ることとなった。

この1点を除き、以上の活動報告が原案通り承認された。

議案2. 選挙管理委員の選任について（吉原令子幹事）

幹事から：船橋邦子、吉原令子

非幹事から：釜野さおり、村尾祐美子、小澤かおる
 全員が承認された。

議案3. 学会費の改定について（牟田和恵幹事）

年収スライド3段階制への移行

400万円未満 6000円

400～600万円未満 8000円

600万円以上 10000円

の原案通り、承認された。

議案4. 2008年度決算報告（清未愛砂会計担当幹事）

原案通り承認された。

議案5. 会計監査結果（橋本ヒロ子監事）

会計が適正に処理されていることが報告され、承認された。

議案6. 2009年度活動方針・活動計画（海妻径子幹事）

木村涼子代表幹事より、ただいま調査進行中の会員の生活実態調査について補足があり、原案通り承認され

た。

議案7. 2009年度予算案について（清末愛砂幹事）

原案のうち、学会誌関係支出が、横書き化がなされない場合は変更の可能性があることが補足された。この

点を含みおいたうえで、原案通り承認された。

議長の解任

閉会

会費納入のお願い——年収スライド制を導入し本年度より会費を改訂

会員数の歩留まり・減少傾向を改善し、学会会計を健全化するとともに、経済的困難を抱える会員を支援し学会の活性化をはかることをねらいとした会費改訂案が2009年度の総会で承認されました。つきましては、2009年度より、当該年度の収入による三段階のスライド制を以下のように導入いたします。経済的困難を抱える会員に対してはこれでは値下げ幅が小さく、支援策として十分とは言えないかもしれませんが、すでに実施している大会報告者への旅費補助制度をはじめとした支援を拡充することで、包括的に支援を行いたいと考えています。会費の納入をお願いいたします。

なお、すでに2009年度会費として前年度までの会費額の一律7000円を納入された方は、今年度に限りそのまま結構です。

また、2008年度までの未納の会費をお支払いいただくときは、年額7000円となります。

また、スライド制導入によって、会費値上げの対象となる会員の方が多くいらっしゃいますが、上記の趣旨をご理解いただき、ご協力くださいますようお願いいたします。

年収別学会費額（自己申告・税込み・該当年度予定年収）

400万円未満（無職・学生含む）の方の会費：	6000円
400～600万円未満の方の会費：	8000円
600万円以上の方の会費：	10000円

【会費改訂に関する問い合わせ先】

日本女性学会事務局

〒272-0023 千葉県市川市南八幡1-16-24

TEL: 047-370-6068

FAX: 047-370-5051

会員による研究会報告 斎藤正美

2009年大会ワークショップ『『ジェンダーフリー』『バックラッシュ』を再考する』において話し合う論点を事前に協議する「プレ研究会」を、2009年6月14日(13時-16時半)、東京ウイメンズプラザ視聴覚室において開催した。参加者は21名。インターネットを通じて告知により、学会以外からも幅広い参加があった。

荻上チキ、山口智美の司会により、ワークショップ発言予定者の井上輝子、荻上チキ、金井淑子、斎藤正美、細谷実、山口智美、それにプレ研究会のみ参加の木村涼子から、ジェンダーフリーをめぐる論争について現在どう考えているかの報告がなされた。その後、発言者どうし、および会場を交えた議論が行われ、女性学会内部では概念、理論的なことへの関心が高い一方で、バックラッシュの時代背景や実態分析が十分なされておらず、弱者男性のルサンチマンが原因であるというような曖昧な論が多く提示されている問題点も指摘された。

この問題について異論をぶつけあい、議論するという機会が今まで女性学会の中で欠けていたことを考えれば、対面で議論する場を設定できたという面では意義深く、立場の相違点の確認をし、議論のスタートラインにたつことができた。また、ジェンダーフリー誤読問題を検討し直すなど、女性学のバックラッシュへの対応のストラテジーをしっかりと検証していく必要性を確認した場となった。

一方、女性学のインターネット対応をめぐる諸問題については、重要であるが十分に検討されていないという指摘が出たにもかかわらず、この場でも議論ができず、今後の課題として残った。

選挙管理委員会より

日本女性学会選挙管理委員会では、2010年2～3月に第16期選挙選出幹事の選挙を実施するための準備をすすめています。この選挙は、日本女性学会一般会員すべての方に選挙権があります。立候補制はとらず、一般会員の中から10名を選んで記入する方式です。2010年2月に、会員名簿とともに選挙の方法、投票用紙を郵送いたしますので、指定期日までにご投票ください。選挙は2年に一度です。選挙運動は自由です。ぜひとも選挙権を行使されますようお願いいたします。

幹事会及び選挙管理委員会からのお知らせ

今号に、名簿作成のための葉書を同封します。11月7日(土)締め切りです。ご協力ください。

日本女性学会では、2年に一度の幹事改選に合わせて、会員名簿を作成してきました。個人情報保護法との関係で、名簿作成を続けるかどうか、幹事会で検討しましたが、名簿は、会員間の交流、ネットワーキングにも役立っていることもあり、今回も作成することにします。名簿掲載項目中、「氏名」および「主な関心分野」以外の項目については、名簿掲載を承諾するか否か、皆さんに選択していただいています。名簿掲載の可否について、同封の葉書に○×をつけてからご返信下さい。返信されなかった場合は、2008年度名簿作成時確認の情報およびその後の連絡にもとづいて作成させていただきます。

また、メールニュースですが、研究会開催のお知らせなどの情報提供をより迅速に、また会員間の意思疎通を密にすることを期しておりますので、できるだけ、配信希望のご記入をお願いします。

同封の葉書ではなく、E-mailで返信いただいてもかまいません

個人情報の取り扱いについて

日本女性学会会員に関する情報(氏名、住所、電話番号、メールアドレス、所属、専門分野、会費納入状況)は、事務局において管理し、会誌・学会ニュース・メールニュースの送付、会費徴収、幹事選挙など、日本女性学会の活動目的に必要な範囲でのみ使用します。

また、会員に配付する名簿は、学会活動のための連絡・選挙および会員間の交流のために作成されますが、氏名以外の情報をどこまで名簿に掲載するかは、会員個人の選択に委ねられます。

会員の著作

- ・杉本貴代栄、森田明美 編著『シングルマザーの暮らしと福祉政策—日本・アメリカ・デンマーク・韓国の比較調査』ミネルヴァ書房、2009年4月、(山口佐和子は、第4章—3を担当) 3675円
- ・小山静子『戦後教育のジェンダー秩序』勁草書房、2009年5月、3150円
- ・渡辺みえこ『語り得ぬもの—村上春樹の女性(レズビアン)表象』御茶の水書房、2009年7月、1470円
- ・広瀬裕子『イギリスの性教育政策史』勁草書房、2009年8月、4900円

会員の投稿についてのお願い

学会財政の見直しにより、2007年度より学会ニュースは年4回から3回に発行回数を削減し、ページ数をできるだけ抑え、2008年度からは編集作業も幹事の手で行っています。発行回数は減少しましたが、掲載すべき情報が減ったわけではないので、以前にもまして紙面の余裕がなくなっております。そのため会員からのご投稿につきましては、公共性がきわめて高い場合以外には、なかなか掲載することができない状況ですので、ご理解くださいますよう、お願いいたします。

(学会ニュース担当)

メールニュース登録のお誘い

メールニュースは学会員のみなさまに有用な情報を不定期にお届けしています。是非ご登録ください。希望者は担当者までお申し込みください。

メールニュースを配信するたびに、何通か戻ってきます。アドレスを変更された方は、速やかにお届け願います。また、お申し込みされているのに届いていない方がおられましたら、ご連絡願います。

メールニュース担当：三井

研究会のお知らせ

知と文明のフォーラム

第12回セミナー 「生殖革命」と人間の未来

生殖医療をめぐる論議が高まる中、夫婦が子を持つ権利、生殖への科学技術の介入の是非など、多くの論点が錯綜している。本セミナーは、この人類が初めて直面する事態、生殖倫理と生殖医療のあり方について文明論的に考察する。

日時：2009年10月24(土)・25(日)

場所：ヴィラ・マーヤ(伊東市八幡野伊豆高原14-7
伊豆高原駅より徒歩25分あるいはタクシー)

参加費：1500円(1日のみ1000円)

司会：石田久仁子(世界女性会議ロビーイング・ネットワーク事務局長)

発言：江原由美子(首都大学東京教授)・中嶋公子(日仏女性資料センター代表運営委員)・長沖暁子(慶応義塾大学准教授)・青木やよひ(エコロジカル・フェミニスト、評論家)

ヨーガと東洋医学の実習：指導 北沢方邦、吉田乙恵

問い合わせ：杉山直子・林祐子

会員主催研究会募集

日本女性学会は会員主催の研究会に対し以下の応募要件にしたがって補助金助成をおこなっています。

〈応募要件〉

- ・研究会の趣旨が女性学会の趣旨に合っているもの。
- ・少なくとも会員に対して、公開の研究会であること。
- ・研究会のタイトル、趣旨、企画者(会員個人・会員を含むグループ)、開催場所、開催日時、研究会のプログラム、全体の経費予算と補助希望額(2万円以内)がほぼ決定していること。
- ・学会のニュースレター・ホームページに掲載する「研究会のお知らせ」の原稿(25字×20行前後)があること。研究会の問い合わせ先を明記すること。
- ・広報期間確保のため、原則として開催の3カ月前までに、研究会担当幹事まで申し込むこと。

研究会担当：柚木、海妻

以下の要領で会員のみなさまの著作を紹介します。掲載ご希望の方は、ニュースレター担当者までご連絡ください。

- 1) 会員が執筆・編集している単行本(分担執筆含む、雑誌をのぞく)
- 2) 1年以内の発行物
- 3) ご本人からお申し出があったもの
- 4) 寄贈は要件としない

ニュースレター担当

伊田久美子

青山薫

「お知らせ」欄は幹事会および会員等からの公共性の高い情報を掲載します。

掲載希望はニュースレター担当者までご連絡ください。

ニュースレター担当